

研究課題：摂食嚥下障害に対するオンライン診療の有用性についての研究

研究者名：原 豪志

所属：神奈川県立歯科大学全身管理高齢者歯科学分野

緒言

情報通信機器の技術的な進歩と急速な普及に加え、今回の新型コロナウイルス感染症（以下、COVID19とする）により本邦ではオンライン診療が身近になった。一方で、高齢化による慢性疾患の増加に伴い摂食嚥下障害も増加しておりその対応が求められる。しかし、これまで摂食嚥下障害に対するオンライン診療の有用性を示した報告はない。本研究では摂食嚥下障害患者に対するオンライン診療の有効性を後ろ向きに調査したので報告する。

対象と方法

2020年4月5日時点で東京医科歯科大学歯学部附属病院摂食嚥下リハビリテーション外来に所属する歯科医師が、摂食嚥下障害を主訴として訪問診療していた成人患者79名を対象とした。当外来では、2020年4月6日から約2ヶ月間（以下、縮小期間とする）、COVID-19の影響を受けて訪問診療を中止した。縮小期間前に、オンライン診療でのフォローアップの希望を患者もしくは介護者に確認した。その結果、オンライン診療を実施したオンライン診療群と実施しなかった非オンライン診療群の2群に分けた。縮小期間直前の対象者の基本情報として、年齢、性別、BMI（Body Mass Index）、原疾患、誤嚥性肺炎の既往の有無、JCS（Japan Coma Scale）、FOIS（Functional Oral Intake Scale）、DSS（Dysphagia Severity Scale）をカルテから抽出した。また6つのイベント（1.入院 2.死亡 3.誤嚥性肺炎の発症 4.窒息、5.嚥下訓練中断 6.嚥下機能低下）を設定し、訪問診療の中止時点から再開時点の間に、これらのイベントが生じたかを聞き取り調査を行った。オンライン診療は患者側と歯科医師側の情報通信機器を接続しビデオ通話にて実施した。歯科医師は、問診、日常の食事場面や摂食嚥下訓練の観察を行ない指導した。統計解析として、オンライン診療群と非オンライン診療群について、基本情報をMan-Whitney-U 検定またはT検定を用いて群間比較し、各イベントの発生有無を、 χ^2 検定を用いて比較した。

結果と考察

基本情報については、両群間で有意な項目はなかった。単独のイベント発生について両群間で有意な差を認めなかったが、イベント3～6の発生数を合算した嚥下障害関連イベントの発生率は、オンライン診療群では13.6%、非オンライン診療群では38.6%であり、非オンライン診療群で有意に発生率が高かった（ $p=0.040$ ）。オンライン診療による食事場面の観察や嚥下訓練の確認といった介入は、摂食嚥下障害に関するイベントの発生の抑制に一定の効果を有する可能性が示唆された。